

「種蒔きのたとえ」

2021年12月17日

「また、ほかの種は、良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍になった。」そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。(マルコ福音書4章8節～9節)

主イエスは、「神の国」を譬えで語られている。神や信仰については、譬えで語ることが有効で、その譬えは、日常どこでもある事柄を通して、聞く者に届くように語っておられる。譬えは、「盆のような月」と言った場合、丸い盆のような月を指しているように、間違っていて理解するととんでもない誤解を生む。また逆に、譬えは想像をかき立てる要素もある。主イエスが語られる譬えは、いつも肯定的(福音的)である。ガリラヤ湖のほとりで、おびただしい群衆が集まって来たので、主イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖畔にいる群衆に「種蒔きのたとえ」を語られた。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。種は神の言葉である。すると、種を蒔く人は主イエスである。主イエスが神の言葉を蒔かれた。御言葉はそれぞれの所に蒔かれ、その所を人たちとして、4つに分類しておられる。

① 「道端」に落ちた種は、鳥が来て食べられた。鳥はサタンで、御言葉の種はサタンである鳥に食べられてしまった。道端は人が往来する道の傍らである。道端の人は、道行く人を眺めるだけで、自分の意思で歩こうとしない主体性のない人であろう。この人は、何事も自分の問題としない傍観者なので、御言葉を聞いても心に届かず、サタンが行き来するのに目を奪われ、サタンの言いなりになる。ポピュリズムに動かされる人は、御言葉の確かさを受け止められない。御言葉は、私であることを是認する。

② 「石だらけの所」に落ちた種は、土が浅いのですぐ芽を出す、日が昇ると焼け、根がないので枯れてしまう。石地の人は、自分の人生経験から固い信念を培ってきた苦勞人であろう。この人は、御言葉を聞いて、新しいものを歓迎する柔軟さがあり、喜んで受け入れる。しかし、根がないので、太陽が照り付けると枯れてしまう。御言葉のために艱難や迫害が起こると、つまずき、御言葉を放棄する。御言葉より、自分が苦勞の中で養った自己過信に舞い戻り、御言葉を育てることをしない。御言葉は、砕かれた魂に宿る。

③ 「茨の地」に落ちた種は、茨が種の成長を妨げる。茨とは、この世の思い煩いや富の誘惑、その他諸々の欲望であり、それらが心に覆いかぶさり、御言葉を塞ぎ、実らせない。作物は、地からの栄養だけでなく、日光と通風がよくないと成長が望めない。御言葉への追従には、自己の放棄、十字架を負うことが求められる。

④ 「良い土地」に落ちた種は、芽生え、育ち、実を結ぶ。良い土地とは、御言葉を聞いて、受け入れる人たちで、30倍、60倍、100倍の実を結ぶ。聞いて受け入れる人たちは、飢え渴いている人であろう。愛と真実を求めながら、得られずに苦闘している。その苦闘に対し、「生きて良い」との恵みと祝福の神の言葉を、自己や他者からの安価な肯定ではなく、神からの是認宣言を全身で聞く。その時、隣人と共に命に与る大きな喜びを見いだす。

主イエスは、御言葉が蒔かれる土地を、これら4つに分類し「聞く耳のある者は聞きなさい」と締めくくられた。この譬えを聞いて、まず、自分はどの土地であるかと、気にかかり、否定的に見ざるを得ない自分が頭をよぎる。誠実そうに否定的に自分を見つめても、益は生み出さない。御言葉には、荒れた土地を良い土地に変え、実をならせる命が込められている。主イエスの肯定(福音)を信じて、祈りをもって委ねて良いのではないか。